

SUPPORTERS CLUB NEWS



# 友の会 会報

TAKAYAMA-UICHI MEMORIAL MUSEUM OF ART

〒039-2501

青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94

七戸町立鷹山宇一記念美術館内

鷹山宇一記念美術館友の会

TEL 0176-62-5858 FAX 0176-62-5860



参加者全員がローソクの火が揺れるケーキを片手に、ハッピー・バースデーの歌を唄って祝っていただきました

## 鷹山宇一画伯を偲んで 遊蝶記に集う

平成12年12月10日

### 遊蝶記

鷹山宇一先生が逝去されてから早くも1年が過ぎました。昨年美術館で町民葬が営まれた日にあたる12月10日に、先生を偲ぶ会が遊蝶記と名付けられて開催されました。

鷹山宇一の作品には、必ず「蝶」が描かれています。若いときから、動きのある絵が描けなかった父は、「蝶」を動くアクセサリーとして、絵画面に登場させました。作品ができあがると、左手に蝶の標本を持ち、細筆のメンソウで一つひとつ丁寧に蝶を描いて完成するので、「花」だけでなく、「人物」にも「静物」にも、「蝶」がはいり、目をつぶっ

ても蝶は描ける、と言っていました。

そんな父の戒名も、「伯光院遊山宇蝶禅居士」とつけて戴き、蝶は父の別称ともなりました。

——遊蝶記——の「記」は、本来ならば「忌」にするべきところですが、辛気くさいことが嫌いであつた父の意向と、「記」は「記憶」の言葉通り、憶えておく、また、「記録」や「記述」のように書き記しておくことの意味合いがあり、「鷹山宇一をいつまでも忘れないでいて戴きたい」「美術館の歴史のなかに書き残しておきたい」と、そのような思いで——遊蝶記——としました。

昨年12月10日に、この美術館で「鷹山宇一を偲ぶ会」が行なわれました。奇しくも、その日は父の91回目の誕生日でした。

前日、降りしきる雪をじつと美術館の窓から見ながら91年前に今日のように舞い散る白い蝶に見守られて誕生した長男宇一を、わたしが出会うこともなかった祖父は、どんな喜びの思いで抱いたのであろうか、と想像いたしておりました。10日の「偲ぶ会」はせめてもの父の気遣いだつたのでしょうか、おだやかな冬晴



第3展示室に再現された鷹山先生のアトリエの様子

れの日となり、わたしたちを安堵させました。孫娘が歌う『アヴェ・マリア』をどのような顔をして天上から聞いていたのか、知る由もありませんが、小原恭平初代館長や谷村保雄室長ら、美術館を見守り続けてくださっている方々とともに、照れ笑いをしながら耳を澄ませていたのである、と考えています。

くださいましたことは、館長としてほんとうにうれしゅうございました。

今年度の遊蝶記も、小雨こそ降りましたが、寒さはゆるみ、遠く弘前、青森、八戸からのご出席も含め60人以上の方々、ローソクの火が揺れるケーキを片手にハッピー・バースデーの歌を唄って祝ってくださいました。

青春まつただなかを駆けている若者たちが、割れるような音で彼らの心を美術館の壁に打ちつけていました。ご参集の人たちが、その思いをあたたく受け止めて

館長 鷹山ひばり

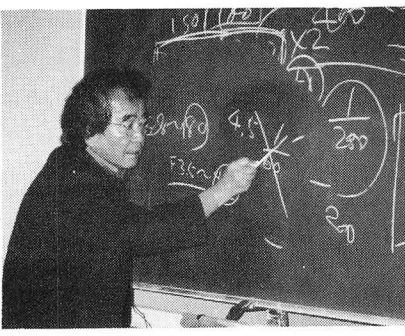
# 「第60回国際写真サロン」展「終了」

美術館での開催が4回目となる第60回国際写真サロン展が無事終了した。今年も海外80点国内50点の入賞作品が展示された開催期間中、11月という寒い時期にも係わらず、写真愛好家等町内外の来館者で賑わった。本展に関連して地元フォトしちのへが主管となり、

木村恵一日本写真家協会理事をお迎えして、11月19日(日)、午前中は七戸中央公民館で「水の表現の仕方」と題して作例を使つての写真教室が開かれた。突然の雪にもめげず上十三地区は無

論、弘前、青森地区からの参加者を含め60名が熱心に先生の講義をうけた。午後

講師の木村恵一先生  
午前の写真教室(講義)において



モデル撮影会開会式で  
右2番目から、後藤事務局次長、  
木村先生、モデルさんの姉妹



からは会場を美術館中庭に移し、モデルに本年度ミス小川原湖のストーニー・セツサさんと妹のケルティさんを迎えて撮影会を開催。雪の舞う寒い中でも80名のカメラマンが、雪日での露出の決め方、モデルさんの表情の捉え方などを木村先生、後藤全日本写真連盟事務局次長の指導を受けながら、今年最後のモデル撮影会を堪能していた。2人のモデルさんはほとんど日本語が話せなかったが、身振り手振りを交えての片言の英語で

撮影指導を行う木村先生



も何とか通じ合えた。この撮影会の作品は12月20日締切りでコンテストを行い、2月上旬に美術館で表彰式を行う予定です。友の会理事・フォトしちのへ

石田 清剛



雪も寒さもなんのその

## 県立郷土館&棟方志功記念館 研修旅行記

10月1日(日) ■会員17名が参加

仲間が好かつたので軽い気持ちで参加しましたが、思い

掛けず「反骨の画家・常田健」の大胆なタッチの中にも素朴な優しさのあふれる数々の絵に触れ、魅せられ、天気は好いし、お昼のお弁当は美味し

いし、来て好かつたと思いましたが、その2、3日後、偶然にNHKテレビ「美の朝」で、常田さんとアナウンサーとの対談を見て、柔和な風貌と少し含羞んだ様子の語り口に、あの

力強い描線、逞しい農民の姿等はどうやって?と、もつとゆつくり観賞して来れば好かつたと思っております。【I・S】

◆ ◆ ◆  
このたびは、研修旅行にお誘い下さいましてありがとうございます。また、天気に恵まれ、青森の町を歩いたのも何年ぶりでした。楽しかったです。

◆ ◆ ◆  
常田さんの絵は素晴らしかったです。私たちの年代ピツタリ。子供時代、私も一通り働いてきましたから...。懐かしいやら、それ(農作業の様子や人々の姿)がまた絵に描かれてあるのを見ると、私や母が働いているその様子が目に

浮かんできます。時代と共に(農作業が)機械化し、またその機械の移り変わりなど、大変良く描かれてありました。ただただ、いいなあ、と心でつぶやいて見て来ました。【匿名】

◆ ◆ ◆  
秋晴れの青空の下、友の会研修旅行に参加。常田健展では、一枚一枚作品の説明があり、常田さんの絵に対する思いを知ることが出来ました。作品は、農作業の中で仲間が助け合い働く姿、仕事の合間に父母が児を抱く姿、父が児を肩車している姿など、とても暖かさを感じるものでした。

◆ ◆ ◆  
研修旅行では、友の会会員のおしゃべりが楽しく、絵について話したり、それぞれの立場で会話は尽きることなく続きました。人との触れあいを暖かく感じた一日となり、うれしく思います。【N・H】

◆ ◆ ◆  
好天に恵まれ、秋晴れの七戸町を後にして県立郷土館へ。幼少時代から絵が好きで、農民や漁民を大胆な構図、単純化された線、明快な色彩で時には強く、時には暖かく描いた常田さんの「ひるね」「飲む男」、そして、真つ青な空に母親に抱き上げられた赤子が力一杯に両手を広げた「母子」など、生きることへの強靱な意志を感じさせられた作品の数々でした。林檎を

栽培するかたわら、土蔵兼アトリエで60年近くに渡り創作活動に励み、一貫して農民の姿を描き続けた常田さんに感動しました。また、お昼はワシントンホテル2階の素晴らしい和室で初秋の和風料理をいただき満腹に。その後、棟方志功記念館へ。入口前の庭は池泉回遊式庭園として趣を添えて、板画板画の中に「善知鳥板画巻」「釈迦十大弟子」「女人観世音板画巻」など、国際板画大賞、文化勲章を授与された棟方志功の世界に感動を新たにしました。一緒に旅行に行かれました皆様ありがとうございました。楽しい一日でした。【O・S】



青森県立郷土館前にて記念撮影

※原稿をお寄せいただきまして、本当にありがとうございます。紙面を借りてお礼申し上げます。

# 日本を代表する作家たちによる 日本画・洋画・工芸の名品が大集結!! 「椿絵名品展-北限の椿・あおもり」 盛会のうちに終了!

9/30(土)～10/29(日)までの会期中  
4,785人という

多くの美術ファンの皆さまに  
名品の数々をご鑑賞いただきました



9/29(金)オープニング・レセプション記念講演会開催



「ご挨拶を賜りましたお一方  
高崎タワー美術館・細野正信館長(右)  
本展の開催にご協力を賜った大東京火  
災海上保険株式会社より、広報室  
山本勝彦室長(左)」



「本展の監修をされている細野先生によるキヤプリートーク。講演会終了後、実際に作品を見て回りながら椿絵一点一点を解説いただきました。」

## 「椿絵名品展」記念講演会から

講師 ★ 細野 正信 氏 (高崎タワー美術館館長)

およそ1時間にわたり、日本美術史を中心としたお話を頂戴いたしました  
配付されましたレジュメからご紹介します

日本画と洋画(油絵・西洋画)の今日に至るほぼ百年の画風の変化を、一口でいえば、日本画の洋風化、洋画の和風化ということになる。もちろん時代を超越した天才肌の人も多く、一概には言えないのだが、それはそもそも近代の出発から始まっている。

日本画ではアメリカ人フェノロサが復古運動を興し、古名画の精神に学んでそれを自己の心に移し、それを独自の形而上(超自然)の世界へ昇華させ、そこに自然以上の観念なり感情なりを暗示する芸術を望んだ。そして同時に明暗による構成や調和的色彩を加えて合理的表現に近づけ、油絵に充分対抗せねばならぬとした。この考えを更に押し進めたのが、彼の門下岡倉天心である。天心は始めのうちは写意(精神的要素)を尊んだが、それでは理想的で実境を離れたから、写実を目的としてそこに暗示を象徴せよと方向転換を図る。明治36年のことで、それは横山大観・菱田春草が創始した朦朧体(線のない色彩画)が不評で、それに正確な造形性を出そうとする配慮であった。一方、フオンタネージの指導から出発した油絵は、黒田清輝が明治26年、フランスから帰国し外光派ないし印象派をもたらすが、彼はそこから光や空気表現を採り入れながらも、模倣から脱して日本的に描くことを奨励した。

大正期になると日本画は大いに洋画に近づき、速水御舟が出てヴァールールを採用し徹底写実を試みた。この方法は若い画家達に迎えられ帝展・院展を問わず画壇の流行となるが、それには岸田劉生の主張が影響していた。「写実は装飾を伴わなくては真の写実とはなり得ない。装飾とは感情で据えた質感の美=内なる美=を言う。従って写実は装飾である」と言うのがそれで、草土社風として一世を風靡する。また小杉未醒(放菴)や今村紫紅の南画への関心は、日本画家・洋画家を問わずその自由な主観性によって高まり、フォービスムの野性と共鳴して新境地を開拓してゆく。以上は明治・大正期の画壇の大要をのべたにすぎないが、今回の「椿絵展」の作品はこの後の多様な昭和期の展開上に位置する。世界的にも珍しいコレクションで、平成元年ベルギー開催のユーロ/パリアジヤパン展の出品候補に上げられたこともある。

コレクションの内容は、若干の古美術も含まれているが、大方は昭和期の日本画と洋画で、各人同一テーマによっているから、その画家の画風が手にとるように分かって面白い。と同時に画壇の諸傾向が浮き彫りにされている。それでは全作品とはいえないが一点一点の見所について解説を試みよう。しかしこれはあくまで一意見であるから、皆さん各自の感想は自由に持ってほしい。

10/1(日)  
茶道表千家淡文会七戸会  
の皆様による  
お早茶のサービスが行われました  
ご来館のお客様に  
豊かなひとときをご提供いただきました  
この場を借りてお礼申し上げます  
ありがとうございました

## 「椿絵名品展」にご来館のお客様の声から

会期中、本展や当館に関するご意見・ご感想をアンケートという形でお伺いいたしました。大変有り難いお話の数々でした。  
ここで、誠に勝手ながら、ほんの一部ではございますがご紹介させていただきますと存じます。今後も皆様のお声を心に留め、美術館の運営に尽力して参りたいと存じます。  
貴重なご意見・ご感想、本当にありがとうございました。

「本展の開催を機に、本館の歴史や文化について、ぜひともご紹介してほしいと思います。また、本館の歴史や文化について、ぜひともご紹介してほしいと思います。」

「本展の開催を機に、本館の歴史や文化について、ぜひともご紹介してほしいと思います。また、本館の歴史や文化について、ぜひともご紹介してほしいと思います。」

今日は展示場におさわぐない私語がひどいと思いましたが、つい係の方にお話してしまいました。大変失礼致しました。でも美しい絵ばかり静かに鑑賞したいと思っております。次回のご案内をたのしみにております。

椿の絵をこの展覧会にはいろいろな画風でたくさんの作品を見ることができてとても楽しい展示でした。とくに陶芸はやはり良かったです。同じ花では思えないほど、バリエーションに富んだ展示で見ごたえがありました。

お礼の言葉をいただき、誠にありがとうございました。本館の歴史や文化について、ぜひともご紹介してほしいと思います。次回のご案内をたのしみにております。

2000年  
6月3日(土)開催  
友の会主催美術講演会から

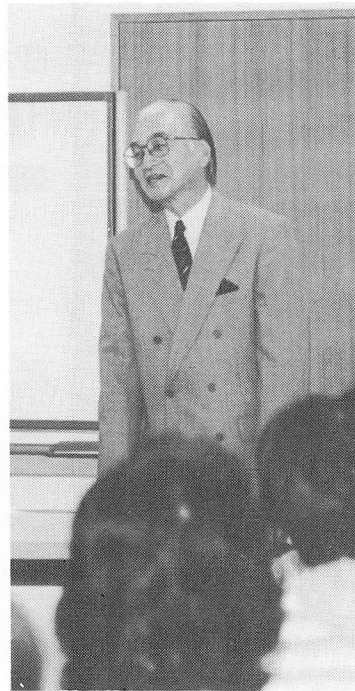
■テーマ■

『私が出会ったアーティストたち』

■講師■

(株)東奥日報社代表取締役社長  
佐々木 高雄氏

2時間2回分のお話ししたステキなお話の数々を、今号と次号の2回連続でご紹介して参ります。なお、テープおこしに時間を要してしまい、内容のご紹介が遅くなってしまいましたこと、お詫び申し上げます。



自己紹介から

佐々木でございます。非常にうれしいことは皆さんと同じフロアでお話をさせていただけるといふことで、大変喜んでおります。高いところでのやるのや白い花を付けるのをやめてほしいし、先生というのもやめて下さい。僕は、しがたない一記者ですので、先生という形容には程遠い存在です。せめて「さん」ぐらいで言

って下さい。

お袋が旧姓三戸と言います。北郡の板柳町の奥に新兵衛派立という村がありまして、新しく開田した人物が三戸新兵衛といまして、その三戸新兵衛がどこからきたのかというと三戸町か田子の郷土で、御一新の時、食い詰めて津軽にやってきて開墾をしたのだと思いません。したがって私のお袋は南部出身で私はハーフでございます。もらった嫁さんが野辺地で息子は4分の3南部です。今ハノイにいま

す。また30前ですが外国で暮らしてみろということ。私自身3才の時、親父の仕事の都合で北京に渡りまして、その頃まだお袋20代前半で昭和11年、生まれたばかりの妹をねんねこで背負い私の手を引いて、弘前から北京まで汽車に乗って旅をしたんですね。20代の結婚したての女性が親父の後を追っかけて北京まで旅をしたというのですから、たいしたものだなと思えました。今、自分でも飛行機で北京まで行きましたが、釜山から汽車に乗ってずっと旧満州へ行って、天津を過ぎて北京に行くなんて、到底考えつかない話です。

高校時代

新制弘前中学の一回生で、新制弘前高校に入って、はじめに女生徒16名と一緒に授業になりましたが、その女生徒全部、先輩達に盗られてしまいました。

私の美術の遍歴のはじめは絵ではなくて音楽でした。中学の音楽の先生が何もわからない生徒にヘンデルのハレルヤのコーラスをやらせてくれて、青春時代の土台を創った気がします。何にもない時代で、張り切らざるをえなかったんだろうと思います。

また、中学、高校時代、親父の影響で考古学が好きになり、ひまがあると山に行って土器を掘っていました。

高校3年のある時、フランス歌曲の先生がリサイタルに来まして、音楽部から3人の中に選ばれてその先生の前で歌を歌わされたことがありました。その先生に「うちに来て勉強して芸大に入らないか」と言われましたが、好きな学問があると断り、音楽部を破門になりました。

大学時代

その後は芸術とは関係の無い早稲田大学の史学科に入りました。

日本に帰ってきてきて仕事をやっていた親父が事業に失敗しまして、学費が一銭も無くなってしまつて、アルバイトをやっていたんですけど、肉体労働だけのアルバイトでして、しかも一日240円より貰えない上、150円位をシヨバ代としてとられてしまつたという劣悪な環境の中で働いていて、食うや食わずの生活で、とうとう栄養失調になり学校にも行けなくなつてしまいました。昔、新宿の2丁目に歌声喫茶の「どん底」という店がありました、ロシア民謡等

美術館日誌

【9月】

- ◆展示替え作業のため臨時休館(9月1日～4日)◆NHK絵馬館を取材。青森県議会文教公安委員会様視察(5日)◆七彩会「油絵教室開催(10日)◆火曜サロン開催(12日)◆「手塚治虫の世界展」交歓会開催(14日)◆(財)鷹山宇一記念美術振興会理事懇談会開催(20日)◆青森高校F.A様67名来館。二戸町中央公民館様来館(22日)◆F.M.あおもり「椿絵名品展」紹介(26日)◆七戸中学校第3学年職場体験学習13名受入(27日)◆「椿絵名品展」オープニングレセプション、高崎タワーマーケット「椿絵名品展」開催(29日)◆「椿絵名品展」初日。(財)鷹山宇一記念美術振興会平成12年第3回理事会開催(30日)

【10月】

- ◆茶道裏千家淡交会七戸会によるお茶開催(1日)◆プリヂストン美術館富山館長、二科会会員西野先生来館(2日)◆「七彩会」油絵教室開催(8日)◆火曜サロン開催(10日)◆七戸町議会総務教育常任委員会様視察(12日)◆七戸町文化ガイド講習会(21日)◆「七彩会」油絵教室開催(22日)◆七戸町議会建設常任委員会様視察。七戸中学校生徒「椿絵名品展」鑑賞(27日)◆「椿絵名品展」最終日。江戸千家様60名来館(29日)◆展示替え作業のため臨時休館(30日)◆11月2日)

【11月】

- ◆青森県庁議メンバ―県政記者会様視察(2日)◆「七彩会」油絵教室開催(5日)◆七戸中学校第1学年職場訪問3名受入(8日)◆函館市みちのく銀行七重浜支店様来館(11日)◆火曜サロン開催(14日)◆岩手県商工連合会様視察(15日)◆展示替え作業のため臨時休館(16日)◆「第60回国際写真サロン」初日(18日)◆国際写真サロン開催記念事業として全日写真青森県本部主催による写真教室とモデル撮影会を開催(講師は同連盟関東本部委員・木村恵一先生)(19日)◆七戸小学校第3学年訪問調べ学習のため5名来館(21日)◆尾上町議会様来館(22日)◆「七彩会」油絵教室開催(26日)◆第8回「J」のサミット様来館(27日)◆岩手県大迫町議会様視察(28日)

演奏する店で、アルバイトでボーイをしていました。ある時マネージャーが「大変だ、列車不通になって予定していたロシア民謡の歌手が来れなくなってしまう」と言っていたのを聞いて「私、ステンカラージュグらいでしたらロシア語で歌えますよ」と言いましたら、「じゃあ、おまえピンチヒッターをやってくれ」と言われたこともありました。

その後身体を壊しまして、九段の学徒援護会館という、困った学生に一月80円で貸してくれるところがあり、入り口に小さな引出しがありまして、10円玉が5枚あり、困った学生はこれを使えとボランティアの方々が入れておいてくれるもので、その時、足が腫れて学校にもアルバイトにも行けず、一日50円でどうやって暮らそうかなと、九段から上野まで歩き、コッペパンを10円で2個買い、上野の博物館に入り、私はそこで王様のような気分になり、自分が栄養失調で死にそうなのに好いものは良いとそこで一日暮した思い出があります。考えてみると私の絵の遍歴は教科書によくある、ゴッホとかセザンヌとか定番の美術ではなくて、クレイやカンディンスキー、日本の

作家では脇田とかからスタートしました。ささやかな新聞社の貧乏新聞記者なもので、だから油絵とか買えません。だからあるのは版画だけ。それも抽象画が多いです。

### 鷹山宇一さんとの出会い

昭和30年から入社しましたが、昭和37年から文化部配属になり、昭和40年東京支社に転勤になりました。その時、鷹山さんを初めて取材しました。毛糸で編んだシャツポをかぶって絵にふさわしい明るくない部屋で、そこまで計算して描いているのかと感心しました。しかも初めて入っていった印象は、画家のアトリエという感じではなくて普通の家なのですが、それでもなおかつ空気が違う、ここは鷹山宇一の空間なんだと感じました。余り話さない方で、そこを何とか文章にしなればならないのですが、とうとう取材にならないで帰ってきた思い出があります。私の知り合いで京橋の南天子画廊という画廊に植松さんという方が居りまして、その方と鷹山先生を尋ねた時、あの時も作品に向かったまま黙々と絵筆を運んでいて、話し掛けたら仕事の邪魔になるのではないかと、

あまり上手な会話をしないまま終わって、その時先生に蝶々の標本のようなものを幾つか集めてきて差し上げたことがあります。

この間、青森で先生の作品を何点かみつけまして、「オヤ！」と思う小品がありました。特定の地名を作品につけることが少ない方なのに、その作品には「十和田湖」とタイトルがついていて、それを見た時、絵というものは出会いではないかと思ひ、これはうちの社に置くべき作品ではないかと自分で勝手に判断して、我社は何十万以上の物は役員会の承認を得てからでなければ購入できないという規則がありますのに、自分で勝手に一人で役員会を招集して「この絵を買いますから」と、一人で決議して買いました。手元に置いてあらためて見るとやっぱり買ってよかつたと思ひます。社員に直ぐ見せなければならぬのですが、私自身が心置きなくたつぷり鑑賞してから出そうと思ひ、実はまだ社長室の奥の部屋に隠してあります。絵ってそういうものだと思うています。

### 工藤甲人さんと南天子画廊

東京支社勤務の時、工藤甲人という弘前出身の日本

画家の個展が南天子画廊でやるというので取材しました。工藤甲人と南天子画廊との出会いも不思議な出会いでした。画廊のご主人、青木さんという方ですが、日本橋の高島屋の横に壺中居という世界でも5本の指に入る骨董屋がございまして、その初代の社長が富山から出てきた広田不孤齋、西山南天子の2人でした。

西山さんとという方が早くに亡くなりまして、娘さんにお婿さんを貰って、そのお婿さんの青木さんに広田社長が資金を出してやって京橋に画廊を出させました。この方、変わった方でした、ある時、日展を見に行つて、工藤甲人さんが切り株の絵を描いていた。当時の画材としてはまずい画題を選んでいたのですが、その絵を見た青木さんはそのまま上野の駅から青森行きに乗り込み、その夜行列車の中で一晩過ごして青森駅で弘前行きになり継ぎ、駅前の交番で「工藤さんという画家のお宅はどこでしょう？」と聞いたそうなんです。そうしたら「おまえ、どこから来た？馬鹿だなあ、弘前は石をぶつけると、皆、工藤だに」と笑われたそうです。探しようが無かつたんですねえ……。それでもどうにか

訪ねて行つて、ポケットにある財布を出して、「私に身柄を預けて下さい」と。それが、工藤甲人さんが上京するきっかけになりました。

南天子画廊での個展に取材に行つて、インタビュして、写真を撮りまして、さあ、帰ろうかなあと思つて後ろをヒョイと見たら、奥の方に青木社長が座つていて「君、君、ちよつと待つて、君、確か東奥日報と言つたなあ、どつかで見たことがある……」「そう言えば、私も青木さんをどこかで見たことがある……：：：うだ！あなた、いつも早稲田の図書館の隅でマルコポーロを調べていた方ではないですか？」「思ひ出したよ！君は考古学の研究室にいた奴じゃないか？」という偶然もありました。

「鷹山さんの作品を扱いたいんだけど、あの作家は寡作な作家で、なかなか手に入らない」ということで、日参してもなかなか手に入らなかつたそうです。というわけで、鷹山さんの作品を主に集めるといふことをしなかつた。変わった画廊でして、梅原龍三郎、林武だとか名のある画家の作品は、自分の納得のいく変わった作品を購入する資

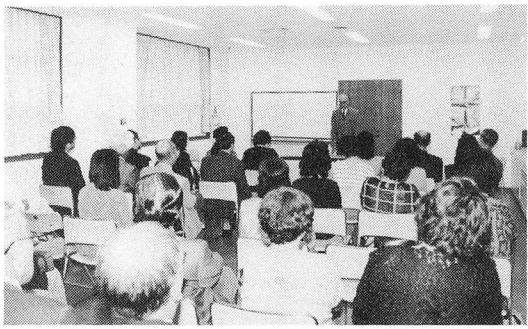
金として、ただ、流していたに過ぎなかつた。だから「うちの画廊には梅原なんぞ置かないよ」という方でした。

そこから私が、ある時私の催促なし、ということを手に入れた作品が、オットー・ヴォルという、ナチストドイツに追われてパリで野垂れ死にしたアンフォルメル作家の作品だとか、皆さんご存知かな、哲学者サルトルの奥さんのボーボワールの妹が画家で、エレーヌ・ド・ボーボワールなどの作品でした。

その画廊に勤めていた植松さんという方が絵に対して敏感で、日本で最初の一般人が参加できるオークションの社長になつた方ですが、私と友人になりました。家に泊まつたりと交流がありました。ヤマハの楽器店に勤めていたが、組合運動をやつて首になり、百科事典のセールスに歩いていました。たまたま南天子画廊に本を売りに行つて、青木さんに「本を売っているより、うちの絵を売つたらどうだ？」と言われまして、彼が「ハイ、そうします」と言つて、売っていた高い本をその場に捨てて社員になつたという話です。

# 岡鹿之助さん、

フランス、シャンソン



岡鹿之助という、パンジーの花だとか冬の発電所など描いていた画家のアトリエに行かないか？と誘われて岡さんのアトリエに行つた事があるのですが、小柄な人でして、アトリエはこの研修室の倍ぐらいありまして、その方は絵を描くことより音楽が好きで、部屋の隅に大きい円柱のスピーカーを置きまして、その対角線上にイーゼルを置きまして、座布団を敷いて、そこにチョコンと座つて絵を画く人で、後ろの方にソファアがあり、音楽を聴くときはそこに座っていました。「佐々木さん、何が好きですか？」と聞かれて「僕は

ドイツロマン派は余り好きではないのですが」と言いましたら「よかった、僕のところにはベートーベンが一枚も無い。僕はヒットラーを生んだドイツなんか大嫌いだ。ドイツ人の作曲家なんか一回も聴かない」と、徹底した人だなあと思いました。古いグレゴリアン聖歌とかビバルディ、それにドビッシューと話が弾み、

「ああ、よかった。僕はドビッシューやラヴェルが好きで、もっと好きなのはシャンソンだ」と言いますと「あなた、私の事を知っているんだらう？」と。実は彼はフランスにいた時、毎日のようにシャンソンを聴きにオランピア劇場に通っていたのだそうです。持っていたジャケットが全部本物のサイン入りでした。

昭和29年に「人の気も知らないで」というシャンソンを歌ったダミアが来たことがありますが。彼女が東京芸術劇場で歌った時、実は僕、聴きに行っていました。一番いい席で聴いて「ブラボー」だとか誰も言わない。「オー」「オー」としか言わないで拍手するだけです。ダミアは地味な歌手で上から一つスポットライトを当ててただけで、真つ黒い衣装を着ているので、手首と

顔だけしか見えない中で「かもめ」とか「人の気も知らないで」とか「街」とかを歌いました。

僕はフランス考古学が一番正統派だと考えて、第一外語はフランス語を選択したせいか、フランス語を勉強するのに一番いいのは新宿名画座だということ、そこでフランス映画ばかり観ていた。だから早熟で不良で酒飲みで煙草のみで女の子になりまして。そんな時代で育つたせいかドビッシューが好きでシャンソンばかり聴いていて、岡さんのところでもシャンソンの話ばかりして、絵の話は一切しないで帰ってきました。その時応接室に大変おもしろい菱形の額の絵がありました。丸い時計の蓋のようなガラスがしてあって、黒いスマイルの絵です。(フランスの蚤の市で見つけた作品で、奥さんが死ぬとその黒い髪をニカワで固めて彼女の好きだったスマイルの花とかに作る習慣があったそうです)考えてみると気持ちが悪いくけど、こんな変わった美の世界があったのかと感動しました。美って何だろう？って思ったんです。ありきたりの物をフルコーラスで食べるのが美ではなくて、好きなものを繋いでい

く事ではないかなと思つています。いろいろな物を繋いでいく、たとえば文学、食べ物、郷土史とか、すべて繋いでいく、それが「すばらしい、すばらしい、15の心」ナンデスネ。それを無くさないのが一番だ。好奇心の塊。「芸は身をたすく」という諺があるでしょう。それなんですよ！

## 岡本太郎さん

昭和39年だったと思いますが、岡本太郎が青森県に来た事があります。私が津軽地方を担当し、青森駅に

出迎えて案内した事があります。名うての岡本太郎だから、下手なところに案内できないなと思ひ、岡本氏に「津軽は知らないから全部任せよ」と言われて余計困りまして、金木の川倉地蔵で、出征した独身の兵士に可愛そうだからと嫁さん人形を世話する、というオドロ、オドロとした所を手はじめに、それから木造新田、田んぼの中のアゼ道に小屋掛けした六地藏なんか全部おもしろいが塗つてある。赤いよだれかけを作つて、田舎の人達は目張りをに入れてやる。そのオドロ、オドロしさ。太郎さん、そこから動かない。写真撮るのさえ忘れていた。その後、

棟方志功が素材にした弘前市郊外撫牛子の神社の鳥居の鬼、久渡寺のおしら様、南部のおしら様と違ひましてキンキラキンで、太郎さんにはたまらない魅力だったと思ひます。久渡寺で出した有名な円山応挙の幽霊の絵には興味を示しませんでした。

岡本太郎という人は直感を大事にしたアーチストなんだなあと思ひました。そのうえ律儀な、世間の常識をわきまえた人でした。後で丁重な自筆の礼状と東京会館のクッキークッキーを添えてくださった。

それからまた東京支社勤務になつて、「私の見た青森県」というシリーズを企画して、小説家、建築家、アーチストだとか取材をしました。その当時うちの新聞社は貧乏な会社で、インタビューに行くのに何もお土産など予算がなくて、私は自費で白木のままの八幡駒を用意して岡本太郎を尋ねて行きました。実は下心があつて、彼はそれに絶対何か描いてくれると信じて：。大変喜んで機関銃のように話してくれました。

## 東山魁夷さん

東山魁夷が出世作「道」という作品を八戸で描いた

のを最初に新聞で紹介したのが私。魁夷のお宅に電話したら奥さんが出て「30分くらいしか時間ありませんよ」「それで、結構です」で、伺いましたら、画商とかずらりと応接室に並んでいて東山さんの部屋に通されて「佐々木さんですね、30分だけです。あの絵はね、

太平牧場でスケッチブックを片手にいましたら、いい匂いがして、それに釣られてあがつて行つた道なんです。既舎の横で牧夫が鯛を焼いていて、私を見たら食べないか？と声をかけてくれた時の絵なんです。あれは道を描いたのではなくて鯛を描いたんですよ」という話をして、時間がきて立ち上がったら後ろに佛像があつて、私が「ハッダ（ガンダーライム）です、ね！」と言いましたら「君何でハッダを知つているの？」それから2時間話し込みまして、出てきたら待っていた人々にブーブー言われまして。

アートの携わる人というのは純な心を持ち主で、控えて、腰が低くて偉ぶるところがありません。私のような田舎新聞記者にも丁寧に接してくれました。

一次号に続く

# 私と功志方棟

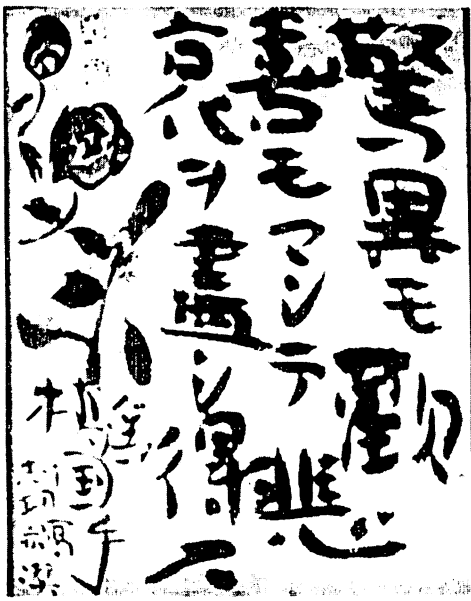
## て寄せて展品名絵椿

七戸町名譽町民

楨哲夫氏より寄稿

元東北大学医学部長楨哲夫博士は、鷹山宇一画伯とは小学校時代よりの幼友達で、ともに旧制青森中学に進まれた間柄でした。

鷹山画伯が旧制青森中学時代に棟方志功や松木満史らと出会い青光画社という美術団体を結成して画家としての歩みを始めたことは、長部日出男著「鬼が来た」や平成十一年の友の会美術講演会での福井平内氏（棟方志功記念館館長）のお話で伺うことが出来ますが、このたび当時の情景を眼にされた楨博士より、友の会会報に貴重な回想が寄せられ



棟方志功より楨哲夫氏に贈られた色紙「驚異モ歎喜モマシテ 悲哀ヲ盡シ得ス 為 楨国手、志功写亦喫」と記されている

ました。ここに会報に掲載して会員の皆様に紹介するに当たり楨博士に心より御礼を申し上げます。

### 棟方志功と私

楨 哲夫

#### 一. 出会い

今思うと、私と棟方志功との出会いは随分と古い話になる。それは一九二一年（大正十年）のことで、私は十四歳の旧制青森中学の二年生であった。その時志功を引き合わせてくれたのは、同じく一年生にいたのちの鷹山宇一画伯であったが、これも一つの奇縁かもしれない。鷹山さんも七戸町出身、小学校以来の幼友達で、愛称宇一チャンで通っていた。中学の寄宿舎も一緒に、鷹山さんは将来二科会の重鎮になったり、また彼の名譽のために、七戸町に鷹山美術館が誕生するだけあってあの頃から油絵に熱中していた。身辺はいつも絵の具だらけで、同室の仲間達は、服まで汚されるといって、口説いていたものである。その頃、うすぎたない格好をした若者が、合浦公園

（青森）へ来て、毎日絵を描いているとの噂があり、それは志功のことであった。寄宿舎は公園に隣接していたので、そういう噂が直ぐ耳に入ってくる。ある日宇一チャンが、今日はスケッチしながら志功に会いに行くというので、私も一緒に後をついて行った。宇一チャンは、その頃すでに志功とは親しい画の仲間になっていた。青森の若い「絵キチ」たちが相い寄って「絵のグループ」をつくっていたのである。それが私が棟方志功に会った始まりで、その時どんな話をしたか、それが何月何日だったのかも記憶にない。ただ、お天気よかつたことだけ憶えている。

#### 二. 志功との再会

青森市郊外の浅虫温泉に椿館という古い旅館がある。湯元ともいわれている。志功が彼の無名時代に、大変にお世話になった由で彼の若い頃の作品が、椿館に沢山あることも知られている。私もまた、椿館の奥さんが七戸出身ということ、古い頃から格別の親しみを感じていた。そして、今まで何べんも浅虫に行くたびに、お世話になっている。

その時、志功は十八・九歳であつたらしいが、彼の身分（青森裁判所・弁護士控所給仕）などは問題外で、まったく知らなかつた。ただ、彼の話し方、その素振りが独特で、その中から彼の油絵に対する熱中ぶりが窺われ、何となしに面白い。それ以来、時々野次馬的に二人について歩いたりしたのであつた。しかし、そう頻繁に会つたわけではなかつた。そして志功がゴッホを夢見ながら、画の勉強の

ために上京したのが、大正十三年九月というから、彼と私の交流は、少年時代の二年位ということになる。志功も鷹山さんも、すでに故人になつてゐることが寂しい。

#### 三. 志功の不思議

前にも記したように、志功が上京したのは大正十三年であるが、その後何べんも帝展を落選して苦勞を重ねている。そして眼も悪いし、色よりも白と黒とで心を表現できる板画（版画）に転向したのだともいわれる。たまたま昭和十一年五月、志功は陶芸家の河井寛次郎について京都に行き、河井のもとで碧巖録などに関して説話を聞き、京都の寺社を訪ねて仏像を見て廻つたという。そして作品に仏像や仏教の言葉を取り入れて、次々に大作を発表した。志功がヴェニスでのピエナレー展でグランプリを獲得して、世界の棟方にのし



彫刻家・舟越保武氏が横哲夫氏のレリーフを制作する際に描いたデッサン。レリーフは公立七戸病院の玄関ホールに掲げられている。

上がったのは昭和三十一年であった。そして欧米の批評家たちは、志功の天才的表現力を認めたのだという。それ以来、わが国の美術界でもおそまきながら、志功の実力を認めるようになり、日展評議員になったのは、昭和三十五年のことである。三十八年に藍綬褒賞を受賞し、そして四十五年には、ついに文化勲章を受賞して、名実ともに世界の、そして日本の棟方が生まれたわけである。これは一つの不思議であろう。

私は志功の芸術を語ることはできない。ただ彼の青年の頃を思い浮かべながら、不思議に思うことが、もう一つある。それはまず、志功が小学校を出たきりであるし、仏典を学んだ期間もそう長くない。それなのに早々と仏心をとらえ、それを芸術的に表現して、世界の人々に大きな感動を与えている。これをもたらしただものは何かということである。私は、これは志功が芸術的天才というだけでなく、率直、自然そのままの人間性を具備し、鋭い感性に恵まれていたことによるものではないかと思うのであるが、いかがであろうか。いずれにしても、これも大きな不思議というべきではなからうか。

## 友の会入会のおすすめ 及び更新について

### 会費規程（規約第五条）

平成13年度の更新手続きは、新年1月4日から美術館窓口、または、同封の郵便振替用紙による方法にて随時受付いたします。

当会の事業、美術館、そして芸術に興味をお持ちのご友人にも是非お知らせいただきますよう、また、今後とも友の会並びに美術館に対して、ご理解ご協力を賜りますようお願い申し上げます。

なお、会員の種別と会費については、これまでと同様です。

平成12年は二科展、県コレクション展、手塚治虫展、椿絵名品展、国際写真サロン展などの特別展がございましたが、入館の際、一般会員の方は更新の際差し上げる無料入場券は入館料の違う特別展でもそのままご利用になれますし、特別会員の方は年中いつでも無料入館できますことを申し添えます。

#### ★一般会員

年額3千円

#### 【特典】

- ① ご招待券3枚贈呈
- ② 入館料・ミュージアムグッズ割引（一部対象外あり）
- ③ 研修旅行・講演会・会報等のお知らせ

#### ★個人特別会員

年額1万円

#### 【特典】

- ① 一般会員②③の特典
- ② 会員証提示によりご本人と同伴者1名迄入館料無料

#### ★法人特別会員

年額2万円

#### 【特典】

- ① 一般会員②③の特典
- ② 会員証提示により代表者と同伴者3名迄入館料無料

※今年度から新たな特典として、新規及び更新会員皆様に「鷹山宇一デッサンシート」をプレゼントいたします。

## ■お便りをお寄せ下さい■

鷹山宇一記念美術館友の会では、会員の皆様の自由なご意見・ご感想を募集し、会報にてご紹介して参りたいと思っております。思い出深い絵、大好きな絵、お薦めの、また心に残った国内外の美術館について、そのほか友の会、美術館へのご質問やご意見・ご感想などを、800字程度で自由にお書き下さい。詳しくは事務局までお気軽にお問い合わせ下さい。

#### 【原稿送り先】

郵便番号、住所、氏名、電話番号をお書きのうえ、

T03912501

青森県上北郡七戸町字荒熊内67-94

「鷹山宇一記念美術館友の会事務局」迄

※なお、会報編集の都合上、原稿に一部修正を加えることがあります。ご了承下さい。

## 鷹山宇一記念美術館

### 休館日のお知らせ

#### ◆年末年始◆

平成12年12月30日（土）  
平成13年1月2日（火）

#### ◆定休日◆

1月9, 15, 22, 29日  
2月13, 19, 26日  
3月5, 12, 19, 26日

#### ◆臨時休館（館内整備）◆

平成13年2月1日（木）  
2月9日（金）



## 編集後記

今年度は友の会主催での初めての海外研修をかわきりに、たくさんの方の研修旅行をしました。21世紀の最初の年はどんな年になるのでしょうか。

皆様方にとって、良い世紀の幕開けになりますよう心からお祈り申し上げます。

なお、佐々木東興日報社長の講演内容が濃く、2回で納めるため増ページにしました。